「諸刃」

亮孔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「諸刃」

【Ｎコード】
Ｎ０５６２Ａ

【作者名】
亮孔

【あらすじ】
主人公「羽炎」は父の無念をはらすため、兵を引き連れ、敵地に向かう。しかしそこには残酷な真実が待っていた・・・。

第一部　―序章―

第一部　　―序章―

静寂・・・・・・。

まさにそれがぴったりだ。この険しい山脈地帯を通るものはめったにいなく、またそこで何者かがさわぐ、という場所でもない。しかし、そこをたくさんの人が歩いてくる。みな手にはきらきらと輝く物を持っていた。それは人には「剣」や「槍」とよばれた。それらはこの場にはまったくというほど奇妙にうつった。そして今、その先頭を歩いているものは豪華な身なりをしている。おそらく相当な身分のようだとわかる。その男は顔をしかめていた・・・

「変だ・・・。」　「もうそろそろ敵の国に入るはずなのだが・・・・」

男はあたりを見回すが、周りはすべて岩でできたがけによって視界がはばまれて何も分からない。

「引き返した方がよさそうだな・・・・」

そう彼がつぶやいたときであった。

歓声が響いたかと思うと突如がけの上に３０００ほどの兵があらわれたのだ。みな手には弓を持っている・・・

「いかん！ひきかえせ！！」

そう彼は部隊に伝えた。がどうやら遅すぎたようだった。

１人の隊長らしき人が号令をかけると、がけの上にいた兵たちはいっせいに弓をかまえ、矢を放った・・・・。

その矢はやがて１つの獣のようにおそいかかってきた。獣は空を覆い、まるで夜になったようであった。

その男の兵は次々とその獣に襲われていった。悲鳴は絶えず、まるでそこは地獄のようであった。
「早く引き返さんか！なにをしている！」
「羽厳様！大変です！」
どうやらこの男は羽厳というらしい。
「今きたところが敵によって妨害され進めません！！」
「上のがけに気をとられている内に回り込まれたものと思います！」
「なにっ！！」
そう羽厳が驚いたときである。
衝撃が彼の背中を襲った。矢だ・・・・・背に矢が刺さったのだと羽厳は分かった。
「羽厳様ー！！」
自分の兵の声が聞こえたが、なぜか変な音が混ざって聞き取りにくい・・・
ふいに何かが倒れるような音がしたが、それは自分が倒れたのだ、とわかった。
目の前が白くなっていく・・・・・
周りでは自分の兵がうろたえていく内に敵に射倒されるのがうっすらと分かった。
「俺はここで死ぬのか？」
そう羽厳は思ったが、そのうち何も考えることができなくなってしまった。
視界が白く、明るくなっていった・・・・・

第一部　ー序章ー（後書き）

どうでしたでしょうか？「羽厳」と呼ばれるこの男はだれか？一体何が起こっているのか？
すべての謎は　第２部　ー宿命ー　であきらかになります。
これからもよろしくおねがいいたします。

第2部　―宿命―

羽厳が戦死してから3年がたった・・・
家がある。表札には「羽」と書いてある。おそらくあの羽厳のものであろう。しかしその家にはあのかつての大将の家とはいえないほどさびれていた・・・・
すると、その寂れた家から1人の青年が出できた。その家とは不似合いのりっぱな顔立ちをしている。その顔はあの羽厳に似ていることから、おそらく羽厳の息子であろうとおもわれた。腰に立派な剣をもっている。その男は歩き出した。どうやらこの町の宮殿に向かっているようである。

「おぬしは・・・」
そういったのはここの城の主である。でっぷりと太っていて、いままでどういう暮らしをしていたかがわかる。
「おぬしはかつての将軍、羽厳の息子ではないか！」
「父のことを言うのはやめてください」
「そうか・・・すまん。」「おぬし、名をいったか・・・たしか・・・」
「羽炎です。」
その息子は答えた。
「羽炎か。」「で、なにようだ？」
「もう18です。私も戦いに参加させてください。」
「むむ・・・そうかあれからもう3年か・・・」
3年、本当に早かった・・・父が死んだのも昨日のような気分だ。
そう、父が死んだのはここの北にある反乱軍の町の近くだ。
反乱軍・・・

とはいってもこんな豚のようなやつに性格が悪く、農民を収集してこきを使うようなやつには誰だって反抗したくもなるだろう。
父だってこんなやつに仕えなければあんなことには・・・・いや過ぎたことを悔やんでもしょうがない。
「いいだろう、お前に５０００の兵をやろう。」
ピクリ、と羽炎の眉がうごいた。ここから一刻も早く出たかった。
敵の総兵力は１０万とも５０万ともいわれている。
どう考えても５０００ばかりの兵で敵の要塞を落とすことなど不可能だ。
「少ないと思うのですが。５０００ばかりでは敵に遊ばれるだけです！」
「今までのよしみで貸してやっているんだぞ。嫌なら貸さん。」
ふざけてる・・・こいつは戦争というものを知っているのだろうか。
とにかく私はここから離れることにした。
城をでると、１，０００騎ほどの騎兵と１人の武人が到着を待っていた。
騎兵は羽厳、つまり父の精鋭部隊である。「最炎」とよばれるこの部隊は、この国の部隊でも１番の強さを誇る。
武人の名は「鬼猿」昔からの親友であり、私の１番の部下だ。
鬼猿がいった。
「どうした？」
「いや、なんでもない。」
「おまえはいつもそうだ。きちんと返事もできんのか？」
鬼猿がわらった。
「５０００の兵をもらった。」
「５千？ほんとにそれだけか？」
「うそなんかいうか。第一あいつがそんなに貸してはくれんだろう。」
「そうだが・・・５０００では何もできんぞ。」
たしかにそうだ。しかしこれもまた運命なのかもしれない。と、羽

炎は思った。
「とにかく、あいつの兵だ。どうせ鍛えられてはいないだろう。」
「訓練か・・・確かに大切だが羽炎、お前の鍛えかたははんぱじゃない。」
「なにをいってる。戦争で犬死にするよりはましだろ。」
「そうかもしれんが、あれはやりすぎだ。」
確かに訓練で、毎回何人かが兵を辞める。しかし私はそれを止めなかった。そんな弱気のやつじゃ兵は務まらない。戦場に行ってもすぐ死ぬだけだ。
訓練が始まるとすぐに弱音を吐くものが現れてきた。そういうやつはいらない。羽炎
はそういうやつは里に返してやった。里にかえって農業に専念していたほうがよっぽど役に立つ。
しかし「最炎」部隊は違った。
部隊には弱音をはくものはもちろん、それどころか息切れ一つもしていなかった。
馬上だというのにきっちりと並び、それは見るものを感嘆させた。
羽炎がつぶやいた。おそらく彼の言葉が聞こえたものはいないだろう。

仇は討つ。かならず・・・・

第2部　―宿命―（後書き）

ここはつなぎの部分ですので説明が多くなってしまいました。
次回はいよいよ、羽炎が出兵します。

第3部　―希望―

日が高く昇る。そのせいで地上には陰はほとんどみえなかった。
もちろん兵達の疲労も計り知れなかった。
その証拠に行きには元気だった兵達も口数は出発の時よりも明らかに減っていた。
城を出てからかなり歩いていた。
―休憩をとるか・・・―
そう羽炎は思って声を張り上げた。
「木陰が見つかったら休息をとる！」
そういったとたん兵達の顔が喜びに変わった。
兵達はまた歩き始める。いささか元気がでてきたようだった。

しばらくすると、丘に木が1本たっているところに出た。その木はとても大きく、おそらく何千年も生きてきたのだろうと、羽炎はふと考える。今日のような天気にでも喜んでいるのだろうか驚いているのだろうか、そよ風にのって葉達が踊っていた。1本の木の、たわいもない遊びなのだろうが羽炎はしばらくその踊りに見入っていた。
他の兵や鬼猿もぼぅっとして気が抜けたようだ。
羽炎は我に返ると、皆に休息をとるよう、うながした。
「見張りを5人ほどたてる！」
そういうと鬼猿が5人すぐに選んできた。
その兵達はこの炎天下のなか見張りにたたされるにもかかわらず、さほどいやな顔はしていなかった。そういうやつでなければ勤まらない。というよりも、羽炎が鍛え抜いた兵にいやな顔をするものはいなかった。いやな顔をするようなやつはとっくに里に帰ってる。

５人の兵はそれぞれ見晴らしのよい所に立った。
それでやっと兵達も落ち着いたようだった。さっきまでピリピリしていた顔はなくなっていた。そよ風に身をまかせる。直射日光が当たらないせいで涼しい風だけが体を抜けた。新鮮な空気を吸うと体の中にいたもやもやがすっきりと消えたような気がした。しばらくここに住もうか。そう思わせられるような場所だった。青空には雲はほとんどなく、まるで空に吸い込まれるようだった。
静かな時が流れる・・・。羽炎がうとうとし始めた頃だった。
「敵です！」ふいにだれかが叫んだ。
羽炎が飛び跳ねたように起きあがるとそこにはさっきの見張りの兵が立っていた。
息が荒く、汗が滝のように流れ出ているのを見ると、よほど急いで走ってきたのだろう。
「北の方角から、３０００程度の軍勢かと思われます！」
周りにいた兵隊が静まりかえった。
そよ風がながれた。
「迎え撃て！」
そう羽炎が叫ぶと兵達もあわせて歓声をあげた。

第４部　―傷刃―

傷刃

羽炎が手を振り下ろした。
すると鬼猿がそれに答えるように自分の槍を前に振った。
全軍が動き出す。さっきは休憩のために急いで上がってきた丘をいまはゆっくりゆっくり歩き出していた。
すると敵も気づいたのであろうか、こちらに向かってゆっくりとしかし確実にこちらに軍を向けてきた。
羽炎は自分の手が震えているのがわかった。しかし恐怖からではなかった。
「血はあらそえぬ、か・・・」
羽炎はぼそりとつぶやいた。もう片方の手で震えた手を押さえると深呼吸をした。
「最炎部隊は敵の左翼から攻めよ！」
そう叫ぶと最炎部隊は走り出す。
太陽が降り注ぎ羽炎軍の槍をきらり、と光らせていた。
「いくぞー！」
羽炎が叫んだ。叫ぶと同時に馬を走らせた。
羽炎は風の中を走っていた。馬の息は聞こえるのに不思議と周りの音は聞こえなかった。
みんなついてきているのか、そう思って後ろを見ると鬼猿がいた。
「あわてすぎだ羽炎！歩兵はそんなに速く走れない！戻れ！」
確かに歩兵はあわてた様子でついてきていた。
「馬鹿者が！指揮者として失格だ！兵とともに動かんと死ぬぞ！」
羽炎にはなぜこんなに鬼猿が怒っているかが理解できなかった。
歩兵の先頭に戻ると着実に歩を進めていった。
敵との距離は５００メートルほどになった。

不意に矢が飛んできた。ヒュッと羽炎の耳元をかすめるとすぐ後ろの兵に刺さった。
その兵はウッというとうつぶせになって倒れた。
じわり、と血が地にひろがっていた。
何を考える間もなく鬼猿が叫んでいた。　「突撃！」
わぁぁ！と兵が叫びながら走っていく。
羽炎もその言葉につられるように馬を走らせ敵陣につっこんでいた。
敵がくる。羽炎は体中の血が熱くなっていた。
敵が槍を突き出す。
顔を横に振ってかわすと剣を振り下ろした。
敵から赤い液体が流れ出した。
その液体が体にかかる。
羽炎には自分が何をやっているのかわからなくなってきていた。ただ無性に前にいる「人」を斬っていた。
ふいに横から最炎隊がつっこんできた。いっきに敵の勢いが弱まるのがわかる。

気が付くと目の前に敵はいなかった。ただ遠くで逃げている後ろ姿が見えた。
後ろで味方の歓声が上がった。期待に応えようと後ろを見たときだった・・・
地獄だ・・・。
地獄が広がっていた。積み上がる死体、味方の兵がまだかろうじて息がある兵に槍を突き刺しとどめを刺していた。
みんなは喜んでいるようだったが、なにをいっていいかわからなくなっていた。
横から鬼猿がきた。
「わかったか、これが戦だ。」
そういうと鬼猿はつばをはいた。

羽炎は胸に苦い物がこみ上げるのを感じた。それをやっとのことでこらえると、剣を突き上げた。
兵の血塗られた剣や槍が続いて上がった。
変わらぬ暑さでいる太陽の光でそれらはかわらず輝いていた・・・。

第４部　ー傷刃ー（後書き）

久しぶりの投稿です。（＾＾）＜ｂｒ＞いろいろあってなかなかすすみませんでした。＜ｂｒ＞これからかなり劇的なことが起こってきます。＜ｂｒ＞おたのしみに～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0562a/

「諸刃」

2010年10月9日00時08分発行